



辻仁成さんの、学問のススメ

少年よ、野心を抱け。

ミュージシャンとしても、作家としても、映画監督としても、さまざまな分野で、多彩に活躍なさっている辻仁成さん。東京生まれで、今はパリを拠点に活動されていますが、福岡を舞台にした小説を書かれたり、ご実家もあることから、福岡は辻さんの日本の故郷です。

辻さんが通われた小学校は、都築学園創業の地と目と鼻。なにやらい縁を感じる辻さんに、「学ぶということ」についてお話をうかがいました。



辻さんが原作・脚本・監督を手掛けた映画「東京デンベル」は、5/20（土）ロードショー公開。また、新作小説「父」（集英社）も5月初旬に発売予定です。

✦ 息子中心のパリでの生活。手づくりの朝ごはんとキッチンに立つ背中で伝えていること

息子はパリ生まれ・パリ育ちの生粋のパリジャンですが、家の中では日本語、朝食は基本和食です。毎朝、私が朝ごはんを作ります。「朝弁」といって曲げわっぱのお弁当箱に朝ごはんをつめて何年も出してきました。蓋を開けたときの立ち上る香りや彩りの美しさなど、そんなところからも日本人としてのアイデンティティを感じて欲しくて。

親がきちんと食事を作る姿を見せることは、とても大切なことだと思っています。息子もキッチンに立つ父親の姿を朝晩見ることで、彼は父親が自分のために手間ひまかけてくれることを悟るのです。片親だからって寂しくさせたくない。仕事も家事も人一倍頑張る父を見せればいいのです。その姿に彼は多少の安心を覚えるはずです。こしらえた父のごはんは「君のそばにいるよ」という無言のメッセージとなります。それに何より、おいしいものを食べれば自然と会話が弾み、おいしいと言われれば私もうれしいし、お互いに幸せになれるよね。

✦ 時間を惜しまず本気で向き合う親子の会話こそが、子どもの生きるのりしろになる

道徳を重んじ、悪いところや甘えた考えをあえて指摘することで子どもの心を強くする、それが息子との向き合い方です。息子に対して、私は厳しい存在でありたいと思っています。もちろん、手を出すような古いやり方はしません。何がいけないのかを徹底して、彼自身が本当に納得するまで、しつこく話し合います。叱るときだけでなく、普段からいろいろな話をします。人間関係、学校のことや社会のシステムのこととまで、毎晩、時間を惜しまず、会話をします。

会話のない親子関係が一番よくないです。夕食後、私は息子の話に耳を傾けます。聞く耳が大事です。そして、必ず意見をします。そうすることで彼はきちんと考えることができるのです。時には会話が議論に発展することもあります。自分の持てる経験を総動員して、真剣に息子と向き合います。ただ論破するのではなく、彼の心を補いながら、可能性を探してやるのです。そして、生きるのりしろを与えてあげるのです。親子の会話こそ、子どもの成長をサポートする一番の栄養剤です。子どもを過保護に育てることは、結局は本人のためにならないのではないかと思います。時間をかけて本気で向き合うことが、子どもの成長につながると思っています。

今、息子はちょうど反抗期ですが、2人の関係は良好です。毎日の食事、時間をかけた議論を通して、時にはスポーツや世界中への旅を通して、よい父子の関係ができていくように思うのです。

✦ 教えてもらう「教育」ではなく、自分で問い自分で学ぶ「学問」でなければ、人は成長できない



「福岡は自由で歴史があって、人もやさしくて言葉もいい。風が吹き抜け、いい気が流れる街ですね」と辻さん。

私が息子とする議論は、フランス語ではdébat（デバ）、仏教では「問答」と言いますが、私はこの問答こそが学問であると思っています。

以前、私は京都造形大学で約10年間、文芸表現科の教授として講義を行っていましたが、これとは別に人間としての心を養う「人間塾」という私塾も主催していました。「人間塾」では、全国から集ったさまざまな年代の老若男女が、広い茶室のような部屋で膝を突き合わせ、ひとつのテーマのもと質問したり議論したりする問答スタイルで、何時間も議論を交わしました。

問答は、自分で問い自分で学ぶ「学問」です。人は学びにより成長しますが、自分から物事を知ろうとする気持ちや、自ら興味を持って学ぼうとしない限り、成長することはできません。「教育」という言葉がありますが、教育とは教えて育てると書き、自ら問い学ぶという学問とは目線がまったく違います。教えてもらうというスタンスでは、学びの面白さを感じることもなく、心も成長しないのではないのでしょうか。だから私は、教育ではなく学問を追求したいと考えています。

✦ 偏差値主義の日本、個人・個性を尊重するフランス

私自身は、先生の知識を一方向的に教えられる日本の学校教育で育ちましたが、その反動でもっと面白いことがあるはずだと思い、外の世界を見ることにつながりました。そういった点では、古き日本の教育は、私にとってのいい反面教師ですね。

今は息子の学校でPTAのようなものを行っていることから、フランスの先生方と話す機会も多いのですが、フランスの学校教育は生徒のいいところを伸ばす、個性を引き出すことを基本としています。優秀な子は飛び級をして、自分が学びたい環境にどんどん進むし、授業についてこれない子は、落第してもう一度やり直します。日本では落第は恥ずかしいことですが、フランスではもう一度学べる機会と捉えられ、いいシステムだと考えられています。

学歴重視で点数主義の日本では、偏差値がとて重視されますが、フランスでは偏差値という言葉は滅多に聞きません。日本のように他の子どもや平均点と比較するのではなく、フランスではひとりひとりの個性が重視されるのです。また、フランスの学校は1年の半分ぐらいが休みなので、授業時間は日本よりずっと少なく、自分で勉強しないと授業についていけなくなります。最近では稀になりましたが飛び級もありますし、落第に関しては、普通に毎年落第者が出ています。日本のように18歳になったから大学に行く、というような年齢上での決め事はありません。学びたい人は年齢に関係なく何年でも学び、自ら積極的に学ぶことがフランスの学校教育の基本です。

✦ 横並びで安定するか、突出した杭となるか

個性を重視するフランスの教育は素晴らしい！と諸手を挙げて賞賛するわけではありません。中庸を尊ぶ日本では、誰もが中産階級でみな同じという良さがあります。フランスには日本では考えられない大きな格差があります。しかし残念ながら、みんなが中の中という意識の中からは、突出したクリエイターは輩出されません。中の中という横並び意識が、日本という社会を改革できないネックにもなっています。ビル・ゲイツやスティーブ・ジョブズのような世界を揺るがすクリエイターは、大人が作った教育の範疇や概念を飛び越えた人たち。皆同じがいいという意識でいる限りは、新しいモノは生まれてこないのです。

「出る杭は打たれる」ということわざの通り、日本では抜きん出た才能は妬まれます。しかし、出ない杭は一生埋もれたまま。日本で出る杭を目指す、ちょっと変わってると言われるかもしれませんが、しかし、人と違うことはオリジナリティがあるということであり、新しいモノを生み出すチャンスを掴んでいるということです。

打たれることを恐れず、ずば抜けた杭となることを目指してください。

✦ 地盤沈下する日本の大学 ランキングや偏差値にこだわるのではなく、もっとビジョンを！

大学の世界ランキングで、日本の大学が競争力を失い、順位を下げていくと聞きました。理由はいろいろあるのですが、私は、偏差値主義が大きな要因だと思います。日本政府はランキングを上げることを目標に掲げているようですが、順位は目標ではなく結果です。

大学のビジョンやポリシー、学生たちが何を学び何を生み出しているのか、どんな未来予想図を描いているのか、それらが明確でなければ、世界の中で日本の大学が抜き出るのは難しいと思います。先程、中の中意識からは突出した才能は生まれませんと言いましたが、これは大学にもあてはまることです。偏差値重視の中の中意識のままでは、日本の大学の地盤沈下は止まらないのではないのでしょうか。日本の大学は、順位を上げるために偏差値を上げる、という考えを捨てるべきです。

✦ 大学とは学生のやる気を開発する場 個性を見てやる気を焚き付けてくれる先生との出会いの場

大学は何をすることかという、学生が自らの人生を自力で獲得する場所、やる気を開発する場所です。京都造形大学で講義をやっていた頃から、学生たちに「自分の中にある才能を発見し引っ張り出すことができたとき、君自身の人生が変わるよ」と語り、学生が自分の才能を発見する緒となる“やる気の開発”を重視してきました。まず彼らに興味を持たせ、なぜだろうと感じさせることで、彼らは自分で問い学び、その中で自分の才能に気づいていきます。才能は自分自身でしか育てることはできませんが、そこに辿り着くためのヒントを提示することは第三者にもできます。それがやる気の開発であり、大学の役割ではないでしょうか。やる気を焚き付けてくれるような先生との出会いは、それからの人生を大きく変えてくれます。

これから大学を目指す人は、偏差値や点数ではなく、自分の個性をちゃんと見て、やる気を焚き付けてくれる、そんな先生がたくさんいる大学を目指して欲しいと思います。



自ら編集長をつとめるwebマガジン「デザインストーリーズ」
世界で活躍する野心あふれるサムライたちを紹介。
<http://www.designstoriesinc.com>

✦ 少年よ 野心を抱いて荒野を目指せ

私は「野心」という言葉が好きです。人を蹴落として自分が這い上がるというイメージで使われたりもしますが、野に出る心と書くことから、この言葉が生まれた頃は良い意味で使われていたんじゃないかと想像しています。ですので、私はチャレンジするチカラという意味で使っています。クラーク博士が学生たちに「少年よ大志を抱け」と語ったように、私は「野心を抱いて荒野を目指せ」という言葉を贈ります。中の中で安穩とするのではなく、出る杭となり野心を抱き、新しい世界、まだ見ぬ荒野を目指して欲しいですね。

私の座右の銘は「世界はまだボクを発見していない」です。今も、この言葉を心に持って生きています。何者でもない自分のはじまりです。これを初心と言います。人間は年を重ねるとだんだん偉くなっていきますし、どこか横柄になるものです。しかし、常に新人に戻ることでその人は成長を持続させることができるでしょう。才能というのは、つまり、自分に対して常に新鮮であることじゃないでしょうか？ 自分におごらず、自分にドキドキし続けて生きることが、その人の一生を豊かにするのだと私は信じています。

辻仁成 (つじ・ひとなり)さん 東京都生まれ。1985 (昭和60) 年にロックバンド「ECHOES」のボーカリストとしてデビュー。1989 (平成元) 年『ピアニンモ』ですばる文学賞を受賞。1997 (平成9) 年『海峡の光』で芥川賞、1999 (平成11) 年『白仏』のフランス語翻訳版で、仏フェミナ賞・外国小説賞を日本人として初めて受賞。著作はフランス、ドイツ、スペイン、イタリア、韓国、中国など各国で翻訳されている。著書に『日付変更線』『そこに僕はいた』『右岸』『永遠者』など多数。詩人・ミュージシャン・映画監督・演出家としても活躍。現在は活動拠点をフランスに置き、創作に取り組んでいる。